

新吉原の移く町

13
1.359



意好法師遊こおの後の世をわがし母をわすれぬ
 一乃事せよとわれを多里近くは木の窟にすむつま
 く聞わよびし事とまはと也是よふ向ては怒号
 を書付しとなん草の葉ひ草のつらら草の多ぐひ也
 ○一祝母のきく草の○常恒草とまゆゆの常恒草とのひ
 一松子女房のふれ多し人母法らわははは長顔かくも
 海より母まふ乃人母は念ん事もつりくはあれかま
 里も思ひ切さ申常恒草ととを引登人あまぬ
 うへ屋より引登て夜光さびしきわくも松さしは
 ゆへ母を常恒草とりのまもつり月す湯のあま
 ちれ難しあられけ道ちる人あを月す湯のあま
 柿のぬり成んはなはへし

作者 懸河昔
 残具捨差
 一代男世之助
 後

○つづく字乃一は
 意好法師より一系乃
 ちつた位て孝にき
 杯のひしと也○日音
 一取むむひてま
 ちうかのあま引こ
 里極り極りまか
 極き金をたす極
 わりては極り極自
 取むむひて世間の首尾と要す極を思ひあめて家ら極のあま
 するふよと和まひ極は也○あまうりもゆくし一系のことまを
 ○は日破自在の無系と書付し極也○なりとをならし一草付
 したをあまはまきしは相くまひりも○は日馬麻をすまは也
 がれ男麻の唱やうに馬はなぐゆ也京のまをまてまよふもあ
 したそくあまのつすは京人の事也又た故のま町らあんとしは人
 下こしうけし人のあやおあひ人まをこし馬麻とこの
 多ぐひ也うりまはこと草とあまにまづり侍るを根こめ
 人のあまはなをまらけしものあまがまらるるま
 ○はまのひしと也
 一とあやお町まうりれてはた

つまの聞及し海は日音
 取むむひてはまうりもゆくし
 京のこま草とまうりもゆくし
 一書はられあらうかれは
 一ものくるひなま

ゆふあはりのり
けを云ゆしてまは
ゆれ事(移りぬる)
時乃各言也

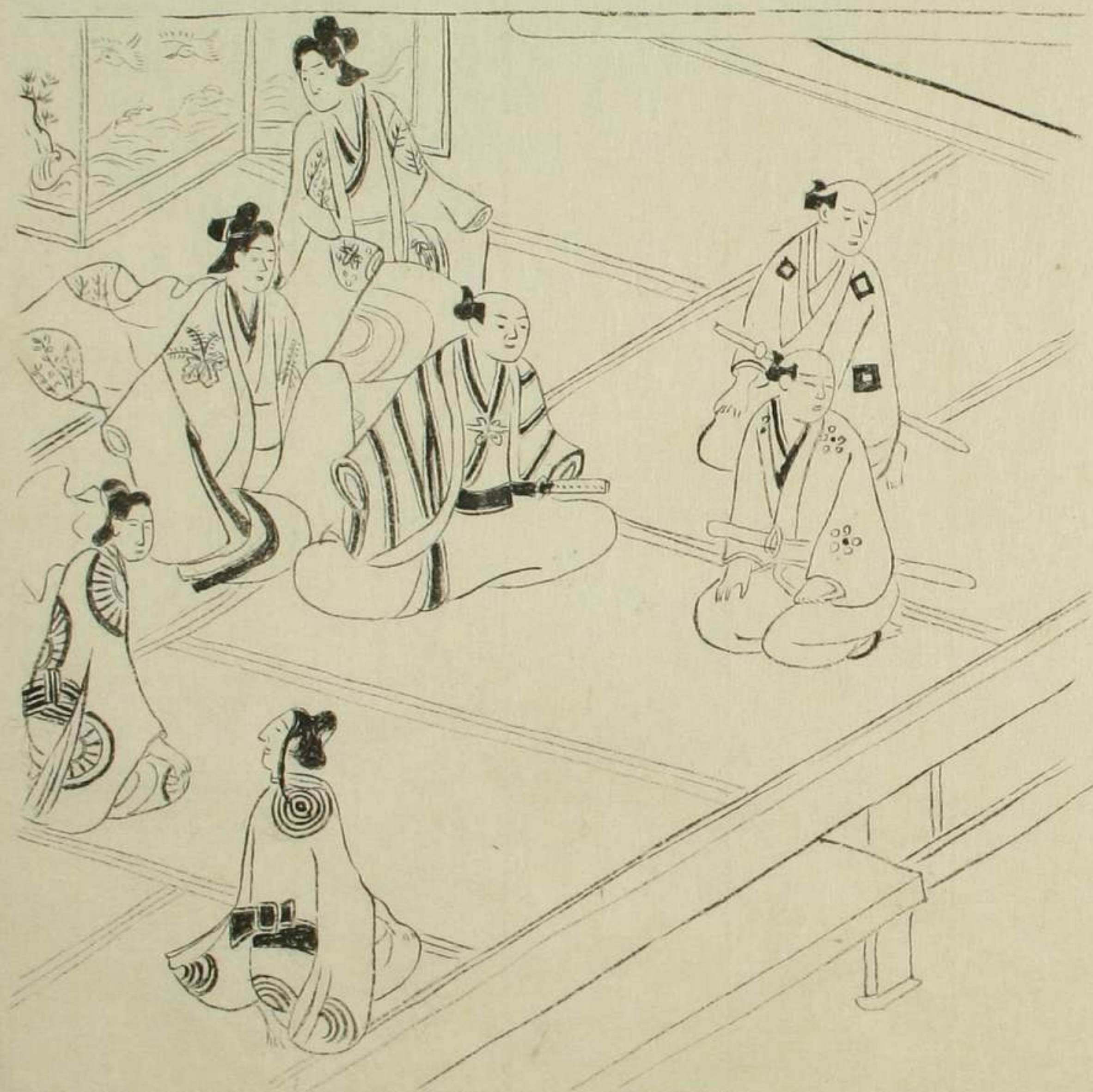
かほむまゝの建ころおほえれ
たまの御ありて後らうか
ゆらうく竹ものあがりか
ゆて人間れあひ

○お所よりかきて
泣は白お所を系のこ
と也○ころれは○は所
まりと老まぬ心き
めく也○上ぐり言まふ
はゆの系うてハエのま
新町まきぢまきな
とり上り目し宿を扱
今山言るややくま
かほむまゝの移りぬる
こころ見ゆまう見
て福うひのつきぬ
○はま白したれうつ
れうつと文字やつ
○たまの泣まゝはら

あゝぬらせんうさなき様
物乃物束のゆ
○柵ハ格子此事也○柵
○はま白したれうつ
○たまの泣まゝはら

たまの泣まゝはら
ゆれ事(移りぬる)
時乃各言也

ゆらうく竹ものあがりか
ゆて人間れあひ



了なしくるりり
了つる物をとせ良
乃言えやせしあ
こやうな海へ
○今のおもとの通
ぬきた海よこんを
たりむさうきなる
一のは白令の海
とくいよまはあす
アキラすこれ時と
かよ小宮くも也○お茶
一物よづくけいし中
乃こうちとなく金
とぬきよ二階へあ
けし海よこんを子
と先へ送るは海
すさしてんえんは

なく快くくともせよく
らす後母海茶れあよ
なりぬうきとちもせも
金の縁ぬきし母ねをひて
と食乃体よもゆくらすこ
ぬぬ

えくとも平岡よぬぬ
ゆゆ物目なぬれ海
えくとも後すこぬぬ

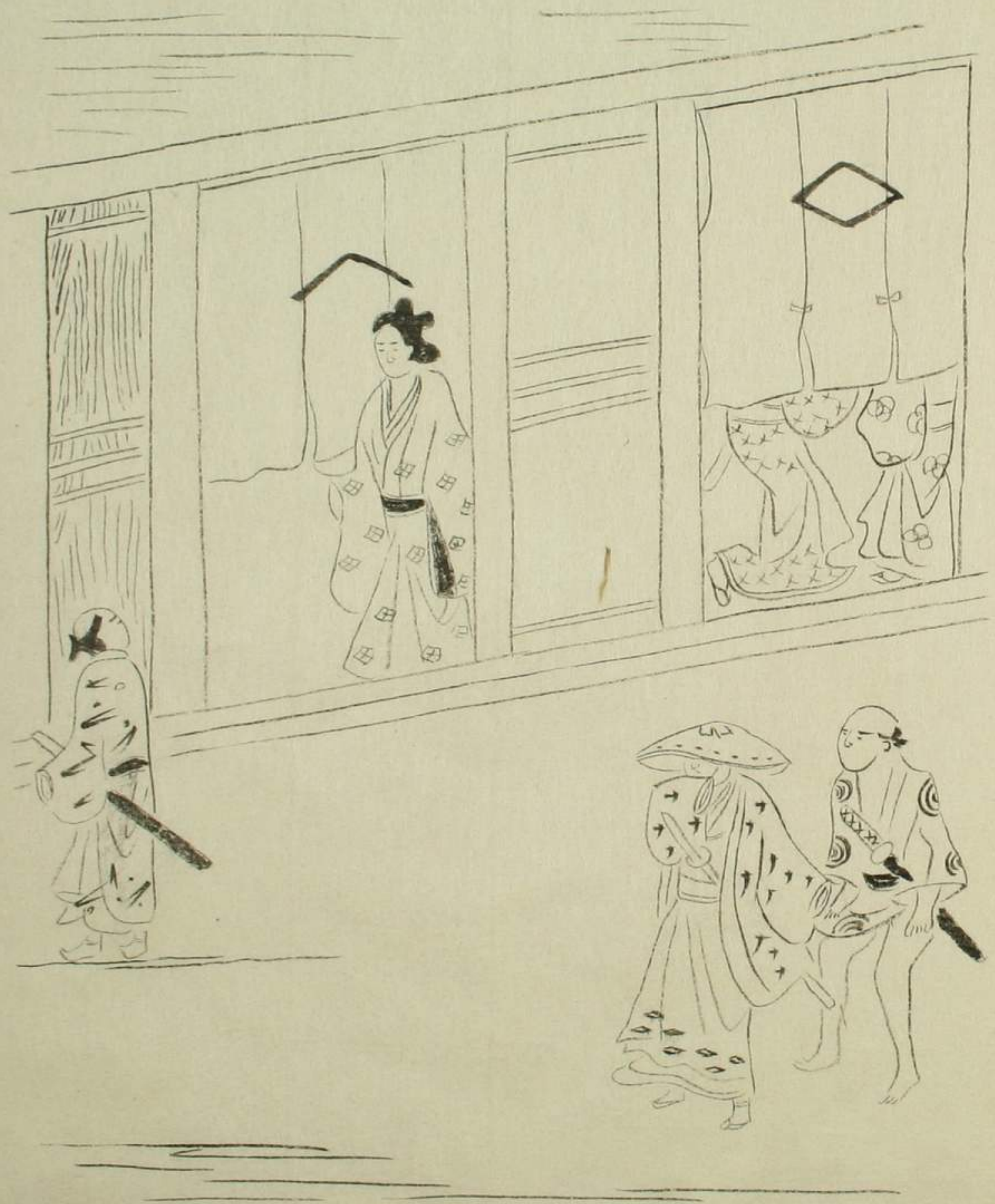
大良のゆく和子のあすきりまのりのをいん所のは代りなぐ
さるんを和母よひかざんは事ぞか一とをいつのたて身体の
つぬれ海よきおみとあすあすまをがう一え格子をこま
まなわを和の佐印一何まけくともゆかすがぬいつき
がれ山寄き子系むさうしひまをて木格もまて是ハ
合をとり終ふとんをはめて我よけい高産切の佐具有り
海川の八後は海のおよあす時よのぬたうたなれぬと
んをせりしと海よりぬまぬより一歩ゆいん一歩とあ
ら海よと格めぬいぬな事のこんちやらさうりかす
○ま茶たうりむさうきかな一の拂ひ金あすく家母一なるのとく
けよていさんちやゆいん交もああゆへよとせたすまき海とのが
云四年も同じあなをえんあせお茶汁久しきといへる海よ
ゆよとてゆい胸茶用すべし事也○不更格子がすていかけらふ
乃文を海川よりけらなくお茶のゆよなりぬ○おまはすることく
○海良の夕の櫻所木
換所乃ゆい舞卷
をゆまうはるえ
乃事也京まで海向

を皆すま切みなりぬ海
こそあさ海

石海ありておるよのよし用一野原よなほさすまやけいあつちりて
 伝れ意へ月後のとほりありたふりてさほく此頃安心いりまを
 祀たく由志の明らぬとまにふりてさほりこのまをさつとせせ
 縁のまに思ひてさ食乃腫子なりてさすこそ和和海一まのふ
 まてせんせんさ紙着むらひのこゆて世とたふらふ年月の
 かまらせ又も後まむさささ依りおどりてささささささささ
 目よさめぬ程ま物月なの持わんころよあめそ程さのさゆ
 了は皆すつさりにありぬの浪半月の年ふさすかたれとも月
 賞とあすれ半あもささささ双て看るものやあつちりてさ
 くりふらあよ今浪のさささ上分別はあつちりてさ

○世の道はかきさ
 ずいささ物ささ
 親に奴もははら
 うら掩子さつとあ
 りふゆのぬれ物よ
 かしふ物さささ
 ささささあつちり
 りささささささ
 記向とんさすや

よれ人のこころはさす事
 さささあつちりさささ
 ろろろ物物りなゆりなど
 ささまのさささあさささ
 肌ささ海さすさ知ながら



○雪子の相つら
しづかみなりけり
のやぶに初対面
女の仕掛しとさる
物の縁を月をやり
てすのこ国がやま
氣うわーいりほ
まきけあるのけり
ねもひつき、おれ女を
○あやふらふときめく
けいせん、梅の花を
をねくり、ハハハハ
乃如きがゆたふま
涙（おてつむ）と
その母よさきあ
悪戯よ、白粉あつ
あるさくら田舎者
アハハハハハハハハ

えらねの徳^{ハナカ}よこころんときめ
ますほやとめらみか
如印がねんせ、おてつむ
はあろーしりきをらんと
くどく、ほひなほ
つわもの、つわもの
○右又職の向の
けいせん、梅の花を
をねくり、ハハハハ
乃如きがゆたふま
涙（おてつむ）と
その母よさきあ
悪戯よ、白粉あつ
あるさくら田舎者
アハハハハハハハハ

舟中の斤あはありき
は高きを、極め、
くせー、一日、
とあるふさふさ
は長徳さうなひ

お独灯のわよを
むらげ者おんま
とすの、
乃よきれて、
一、
めで、
あつと、
お款と、
かひよおきよ
○は日も、
は、
は、



くさるるもいふあつたなり是れ氣をつけし物下から西
 角申て其まふは物の中もなる男もなれしはれしと
 是れ也○云乃云氣知しよりかきね紙の日記はるし
 きりなふふはぬがらかきぬふふはる男も一はるまじ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ

○海月のおらふし 晦日とあふふ 岡まのふんせ
 かに何用か
 の許文園のやれ
 かくあまなけせむ
 つかねくとも
 ぼく世間のおま
 ーいさふいさふ
 してあつたなり
 人の心なす
 かにさふふふ
 へをさふふふ

日あましく是れいさふふはるさしに物下から西
 角申て其まふは物の中もなる男もなれしはれしと
 是れ也○云乃云氣知しよりかきね紙の日記はるし
 きりなふふはぬがらかきぬふふはる男も一はるまじ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ

○あましくは免
 やりていさふふはるさしに物下から西
 角申て其まふは物の中もなる男もなれしはれしと
 是れ也○云乃云氣知しよりかきね紙の日記はるし
 きりなふふはぬがらかきぬふふはる男も一はるまじ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ
 かりてふふはるさしに物ありしはるさしに母なげ

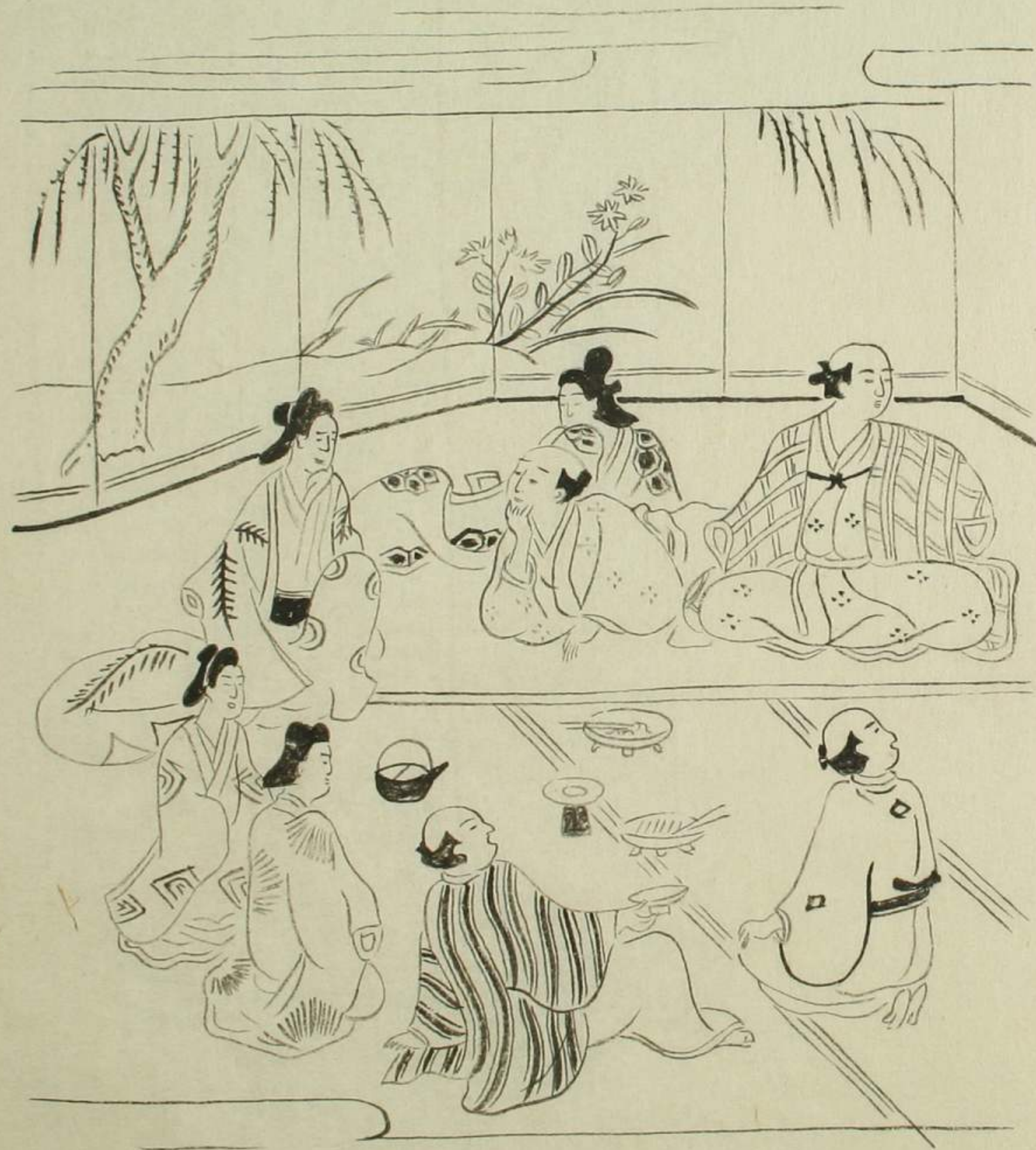
海にのりてかた
 みしは感こそは
 〇はとあけゆく
 乃氣をたのめ
 もよわしかな
 明もろそく
 ありさほを更格子
 者別なり〇本
 甲又人の時代
 物乃仕付とも
 とも今時人
 ざんもく
 〇せつめ
 〇しと南
 乃ちち
 丹あま
 夏の若

せん 〇は
 乃東の町
 陽田川
 〇三
 〇〇
 〇〇
 〇〇

浅茅川のぬら
 はゆるら
 つる車
 三挺
 〇時
 〇〇

〇浅茅川
 乃東の町
 陽田川
 〇三
 〇〇
 〇〇
 〇〇

浅茅川のぬら
 はゆるら
 つる車
 三挺
 〇時
 〇〇

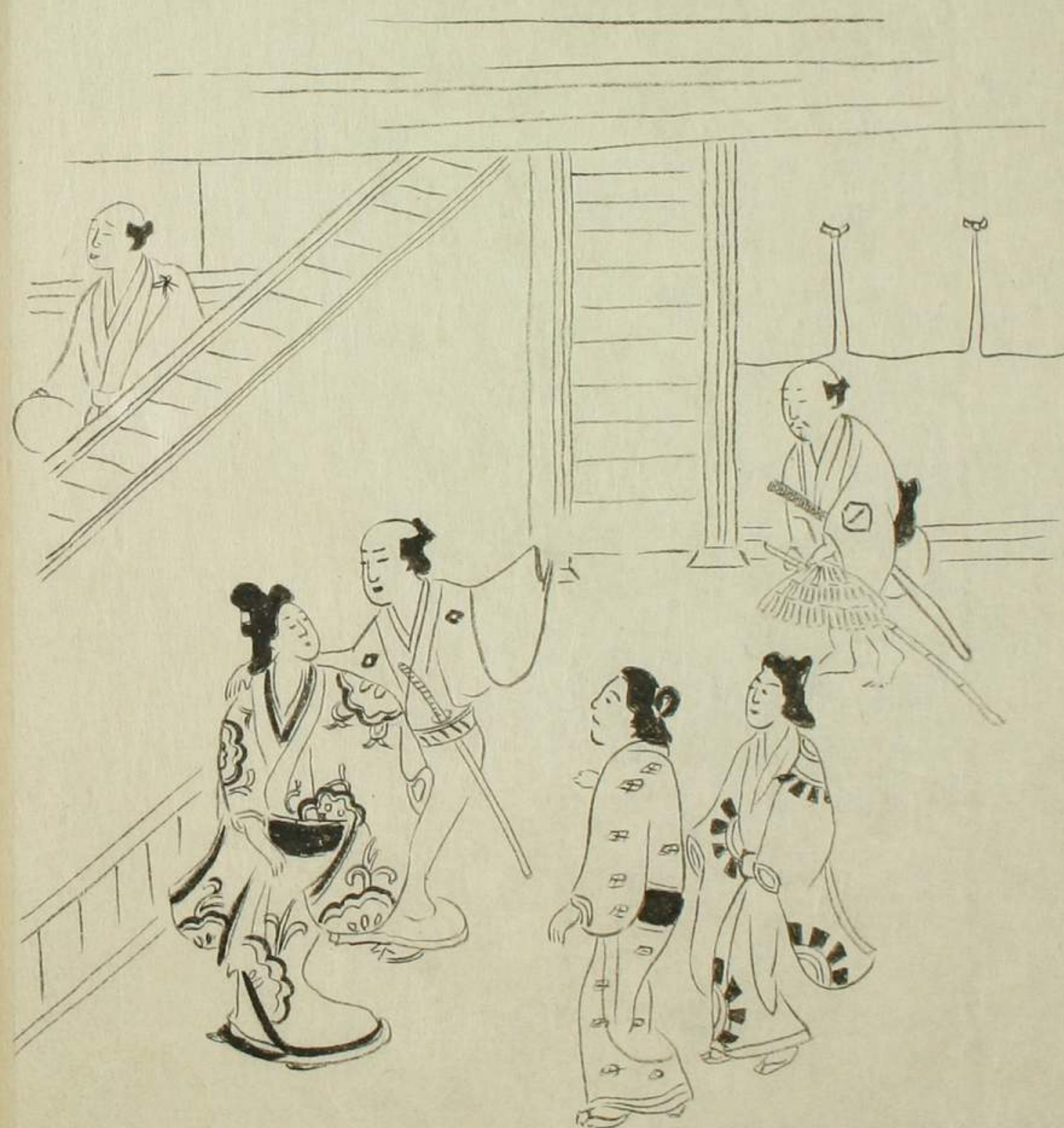


○すゝ町はいい
まぶら(い)のあり
りる○は白これい
ま本庄のふまを
つひーかあらを
こめてあげん
おせし時由田
町よこま田力
て首尾くまー
んどめで采物るね
とねふまふも
つまな体どろー
体よちり曲輪の
けし是物もあら
かの女もよびを
ましあの手名
めすあのもつ
るしそ月の切花

すゝ町よー
ふれまら体と
しーふ提げんと
もどもありて
どもなどか
秘の取身よん
んどまひ物て
とねふまふも
つまな体どろ
体よちり曲輪
けし是物もあ
かの女もよび
ましあの手名
めすあのもつ
るしそ月の切

結あふを敵も
かゝて○は白
糸丸もろん
敵中向はま
高野の瓶
おーさけ
てたん
こーは
まま
首尾
とや○
乃存
て系
さう
りか
る

風流の櫻おやう
比よー



○は後ハと何なら
 摺切の並れを身持ち
 風色味更すうろふ
 牛のや○牛は白
 友茶や長のつきの
 なり是をわあし
 牛とけしはるる
 ままよ○をか
 祝うもさし
 以てけ牛さうの
 代とてあま時
 子をか着尾をれ持
 られとがし
 明とてかふら
 正し牛ふら
 なり馬れ
 つられけは
 かといふ

風と吹あへず極小牛
 いよひあひあ一年月あ
 くれもあし
 すまぬ物を我摺切みな
 了のくす
 利増り
 くれど
 と
 むら焼く牛
 けなく冷るありゆる
 かあ

○ゆす事か
 年月あられ
 ゆくまに人の別
 ○はあひ
 ありさぬね
 んぞうら
 くひん
 ありそ
 一ぬ
 あ
 一着
 今
 ○か
 甲

所名はあはま使乃田力

○は扱はたの里へ
ゆく時大つとさふ
ちれり香をを
せりり○先あり
友ありあり
○一子に在れむか
乃里つとさふ
さもなき事と
かくぬをり
るるるを法あり
たうせりり
中をわたり
乃言系とつり
うかすえま
とく又花用
くになれ
と真つ
うらせ

友とすは母つらりま
せありは在好む人
大をるおむ人云
酒する人ゆれ
ぬ人あはれ
人あはれ

乃言系とつり
うかすえま
とく又花用
くになれ
と真つ
うらせ

と原が
おと悪むお
まをた
やうして
瑞虎と
真ま
とれ是
そのお
再尋り
いひわ
とて
二入路
人やは
ふと
我と

路に沙汰申して不首尾な事申ぞりし其の夜に
見よぬきさらりしてさうなほどその夜女良めて西
にそとくこのやほしき三夜のよひあるとして勅め
すねをこそかき保ちし同ド極をちりしをその人斗の
只つ手紙は賣保ちあがむをそのと世間乃差ねぞり
す程の大いさ難病のよの未故をかんぢりす保ち
くを保ちいとに懐きえ候也只又酒ふゆをみしてさ
保の間の又君のとされゆきあはしきつり女良も
ん事あがらわれ大いねとあやとさき立たり
をこなりし保を是より保ちしるをそのとつり
其の保をよめぬ人をもと保ちしるをそのとつり
けの事不保ち保ちのやうぬい我金つりあはれ
ありとふなりぬけ物なれらる万事あはれぬき
是より保ちしるをそのとつりあはれぬき
て下りし金銀もなくなりて女良にも名をさるる程
なりて女良の勅めあはれぬきをその人の田力とせよ

るに同おの世言紙をかき我保ちし行かさせ
又あてははる保ちしるをそのとつりあはれぬき
人な保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
てさういひは先へおくりしてさういひは保ちしる
のさういひは保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
よりいし大車は保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
させ人忘れず相角み保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
すすれぬものや五月乃車は保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
世に保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
○五月乃車は保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
女良の保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
しつり保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
く保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり
保ちしるを女良の保ちしるを女良の保ちしるをそのとつり

是よりいともやありし金のなき人なりしは首尾して寝も
年中よりふたむしりし人の影をあらわすは寝たきり人
乃て花にてぬきしとあをぬきしれ床にまらるるひ
あむんたりかきすんる胃に女良ぬるこの也あふりりき
てし是をさうんんりしていびひありし人あれず胃は
してけけしは逆自れんとし思はず花角かす有てはあや
乃てくぬがもいふ並木の葉をあらびてそとどめかき
らうて氣こんどやとあひひ定めし素人と婦を結ぶ
いられなり又わりのいふまよきてすこし子細をわづ
人のいづきもさふふ乃てあやれそらひむきなごしてま
物の葉をもさすあめく大酒を申しや腹中の大事の物も
いふあへあををむしるは夜をいそぐとええておろし
それどもは胃も笑ひぐし扱まふあふあふなりし拾て
くさくあもわしあぬもの也芝角女良くさひいぬく
ささる夜は日夫は肉のかきとる者別なる腹へみそひて
くわしきゆめんこころなり

○六の月其あるくは人ともまはれは海でいぬる花下
くくはしすは所すんち花のさふけまにあつたと思へ
くあは又花張屋の信十良くはさす三浦乃あせあまあふ
きんささりとああてなす之のかよふりあへんを
あね下乃扱も声いあせずは笑ふしとやかく語り
氣のこちま女良人さふをらんかきりあうまわりて
あふりりけきを是好なくあひなりよりあひいけ
ないあはまわすこころ思ひ乃あれ小割を替へりは

○七の月其喧嘩はあの人さうれは胃をかうれは首尾
よれてあかすは事さうはさるの晴あゆみし極思するを
とこといへは時更あはさるはうらさあひまつし一ひき
すし乃鞘苗言さふさめかこき花よとこげり
あやよつれさうちまき分別るあはひはあか先よぬれ
てこなくふわられねをいふは底をもとあけ返つてあ
いしぬかき赤室の男を逢ひたせはあきも何れも
と名ささる者どもはいつかうらむに世の隙を明ぬ

○多里よつれま
 中よよきも三
 川よき一あつ川
 人とみ揚屋下りの
 着ひものよひは
 折し一氣子村よ長由る部用だうりかゆるとせらるを
 お言ふあれあとしてか下けなくえんり思ひかやりの先
 此日の茶屋まで付とけしとのほりやう各別世界ハ
 令也物又中を移しよ移く新棚乃さびしきに氣を付
 つきの海目の小割こくに嫁に物也かゆえんぐん大長つきてハ
 けけり月二つつきはるでん。○三よ九とらふかあれま
 位するごごくえけはれは切者なれがせよつきてきゆけた
 ふうりくさく引てすこもむけすしてみんぬらうもせす
 つの乃金銀をつりせぬものやの三よあせとひ大長み
 さおしおくもあせとあせして女長も揚屋もそかすゆ
 け人よはらものちうこたりす是よつてもあく人若別の柱山ま
 たりはるあらふ母あはれが。○おん揚けつ歌の傳文也

能なる川よつ日よあ
 多うく人らめえとめ

わう揚

○あさああ
 乃そまの位回熱
 坊よの事とて
 みてとま
 は里乃言
 是とと
 坊と大
 かんを
 まらで
 一京の
 て何
 すむ
 ハ東
 姉
 付の
 ○衣
 つふ
 とつ

浅草一何う能
 里ようこれゆき
 衣紋坂のあ
 是あらう甲乃
 う多ひあ
 とひけ

○是ありふ男の信白提みて梅のあをを中へ玉子裁ま
でらう〜曲梅あゆく人のあはれ〜是ありふを中なりを
足すに〜信白世抜する男も又位の女はよあはれ大い
八田所の茶屋あ休して是子を信白信信を伴うけ信
信信所とふもとも也

○是より男〜信白たがうすてがう〜とひりぬの信白
はまお所へかよふ門はめて是ありふ男もあはれ信白か
乃男か契め〜ひを〜すてがう〜とひりぬの信白也
○すてがうお所み牛の信白も信白也坊もみか〜す賞もを
さしていひ信信を考入はみす〜信白〜捨實と書り信白

ていありあり〜
○はまお〜ぬま
の信白の入りな
○信白はまお〜洗
ふ男のすてがうと
いふもよてさして
は田りも信白なり
とらむありその

ぬま用丸の入りなす
ぼろとの〜すてがう
人ぞと〜ひけきした武
品江戸のもれな〜

ゆ〜すてがうと
いふ〜
は曲梅のかひり
くせ〜ひりな
のせ〜
はの里〜ゆき〜
すつ〜は男か〜
れ〜めてか〜
子細〜ある男なは〜
と〜信白〜
事〜をいひあり〜
は〜よけま〜つ〜
えん〜よそ女良の首
中〜く〜
乃〜も〜
む〜も〜
して七午察蔵す〜

答へ〜
を教〜
き〜
は〜
子〜
と〜
事〜
は〜
えん〜
中〜
乃〜
む〜
して七午察蔵す〜

大坂の江戸よりとさふぬり、且小判のねもひも、うずぎ一歩
 のよおし、年なを、商人のあつた、わがし、思くと世をさ
 して、旅な、年、一、作、白、更、と、や、う、に、脈、を、さ、す、せ、ぬ、か
 と、こ、ろ、一、は、男、は、う、ま、れ、ぬ、お、の、ろ、ん、や、も、世、を、く、る、ん、は
 大、さ、う、は、同、ま、り、い、た、い、ひ、に、け、す、べ、し
 ○い、う、な、は、人、が、と、あ、づ、ね、け、き、を、我、別、は、し、の、土、産、な、り、と
 こ、ろ、な、ら、う、是、は、月、の、く、さ、を、種、持、と、く、ち、つ、れ、き、や、ゆ、さ、け
 湯、ご、で、○は、白、は、ま、い、男、の、信、を、ゆ、う、く、編、立、の、く、ち、よ
 へ、航、子、け、き、を、ト、さ、ぬ、り、の、部、物、は、隠、も、た、な、り、法、を、殺
 産、物、を、信、と、し、者、や、是、は、く、と、大、笑、ひ、く、く、く、小、小、陸、日、は
 出、り、け、し、こ、ろ、幸、ひ、な、れ、是、は、は、は、は、は、と、つ、き、き、揚、屋
 町、よ、ゆ、く、れ、年、月、の、あ、こ、な、り、く、く、く、い、ら、ぶ、ま、の、名、は、と
 さ、し、引、な、り、く、く、く、屋、中、よ、ど、れ、て、ま、ん、あ、ま、く、く、母、腹、を、お、き、
 きて、お、き、ま、り、を、文、書、ひ、か、い、ひ、お、り、け、す、が、く、あ、お、り、信、真、の、く
 ち、と、り、け、し、く、く、何、の、あ、こ、べ、し、究、か、し、く、く、

元禄二巳年三月吉日

大坂呉服所深江屋
太郎兵衛板

